



Title	生き延びることの倫理：非規範的なジェンダー・セクシュアリティとボールルーム・カルチャーの特集にあたって
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2023, 5, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90080">https://doi.org/10.18910/90080</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集4 生き延びることの倫理：

非規範的なジェンダー・セクシュアリティとボールルーム・カルチャー

生き延びることの倫理：  
非規範的なジェンダー・セクシュアリティとボールルーム・カルチャー  
の特集にあたって

高橋 綾

日時：2022年11月11日（金）19:00-21:00

場所：大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟41号室

【プログラム】

19:00-19:05 司会挨拶（小西真理子：大阪大学）

19:05-19:15 *Paris is Burning* とボールルーム・カルチャー（解説）

ほんまなほ・高橋綾（大阪大学）

19:15-19:45 「パリはなおも燃えている：ボールルーム・カルチャーと

新たな親密圏／公共圏の生成」魚住洋一（京都市立芸術大学名誉教授）

19:45-20:15 「ボールルーム・カルチャーとその表現をどう考えるか：

エージェンシーと文化運動」高橋綾

20:15-20:45 コメント“わたしたちは いきのびなくともよいもの だった”ほんまなほ

20:45-21:00 フロアとの対話

【企画内容】

2022年11月11日（金）に関西倫理学会2022年度大会にてワークショップ「生き延びることの倫理：非規範的なジェンダー・セクシュアリティとボールルーム・カルチャー」を開催いたしました。以下に掲載する文章は、このワークショップにおける各発表に加筆修正の上、原稿にしたものです。

ある規範の強制下におかれる状況において、規範への抵抗やそれからの解放をめざすひとたちがいる一方で、規範にそった生き方をあえて望み選択するひとたちもいます。リスクをかえりみず、みずから声をあげ、規範の強制を批判し、あらたな生の可能性をみいだそうとする前者にとって、後者は解放を妨げ、それを無化するものと映ることがあります。しかし、はたして両者は矛盾し、対立するものでしょうか。対立としてとらえることが覆い隠し

てしまう現実があるのではないでしょうか。

たとえば、ジェンダー・セクシュアリティ、あるいはその他の社会的属性・特性において規範の「外」を生きるひとたちが、規範の「内」にある者を模倣し、いまのじぶんとは異なる姿を他者のうちに夢見ることは、抑圧の現実から逃避し、背後にある社会構造上の不均衡や問題点を隠蔽し、それらを強化することになるのでしょうか。抑圧的な社会構造の下におかれ、その状況を生きなければならないひとたちは、一時凌ぎながらも安らうことのできるじぶんたちの場所、「ホーム」をもとめることなしに、社会変革のためにたたかわなければならぬのでしょうか。たしかに、解放をめざすひとつひとつの動きが、より望ましい社会への変革を導いてきた事実を無視することはできません。しかし、安住か変革か、服従か抵抗か、同化か異化か、という二者択一のほかに、周辺化されるひとたちの生きる道はないのでしょうか。なぜ、そのような選択が「持たぬ者」に問われなければならないのでしょうか。

アメリカ合衆国ニューヨークにおけるボールルーム・カルチャー (ballroom culture) については、映画 *Paris Is Burning* (邦題『パリ、夜は眠らない』ジェニー・リヴィングストン監督作品、1990年) によってひろく知られるようになったことをきっかけに、そこで展開される「裕福」な「異性愛者」の「白人」を演じるアフリカ系、ラテン系の性的指向・性自認が「非典型」とされるひとたちのパフォーマンスをめぐって、フェミニズムやクィア理論の研究者たちが、性的指向と性自認、ジェンダー表現に関する少なくない誤解をはらみながらも、さまざまに論じてきました。はたしてそれらは、人種差別、性差別、同性愛嫌悪、トランス嫌悪、貧困、感染症が交差するところに生きる「持たぬ者」の姿、そのちからを十分にとらえられていたでしょうか。魚住洋一の論考「There's No Place Like Home—ドライ・クイーンと「ホーム」の政治」にて提示された論点を出発点にしつつ、あらためてインター・セクショナリティ／交差性の視点から、抵抗と解放の実践と対立することのない、「持たぬ者」が生き延びることの倫理について、参加者とともに考えられればと思います。

(たかはし・あや)